
ROUND SHAPE

皇みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROUND SHAPE

【Nコード】

N3146BA

【作者名】

皇みかん

【あらすじ】

はるか昔、神々は<箱舟>に乗ってこの地に降り立った。
その世界から忌まわしいモノとされる「赤い瞳を持つ者」であるエラインは、当てもなく転々とする日々を送っていた。
そんななか、旅先で彼は青年と少女と出会う。それをきっかけに止まっていた時が動き始める。
忌まわしい記憶を胸に抱え、自らの存在を確かめるために、彼はゆつくりと道を選びはじめた。それはやがて、世界の秘密へと彼らをいざなう。

異世界ファンタジー。恋愛要素は途中からほんのり。

*****サイト掲載分を少しずつ手直したものです。

警告タグは残酷描写の可能性があるため、念のためつけさせていた
だきました。

忌わしい瞳、冷たい朝日

荒地。

干からびた草木と、何の役にも立ちそうに無い岩だけがそこに存在していた。

生物はわずか。昼も夜も、風だけが吹き、ただ静かに時がすぎていく場所。

ある日、その静寂を破るような悲鳴が、荒地に響き渡った。

「やめて！やめてよ！！」

子供の声だった。その子供は、背の高い老人に押さえつけられ、泣きながら必死に拒絶の声を上げている。

その子供は、少年だった。

「じつとしていなさい」

声をあげ、もかく少年を片手で押さえながら、老人はもう片方の手で短剣を抜いた。

少年はその刃物が太陽の光に反射してきらりと光ったのを見て、恐怖が高まり更に暴れた。

「イヤだ！どうしてなの？！僕、何も悪いことしてないよ！！」

頭を振ろうとした少年だったが、今度は老人に頭を押さえつけられた。

自分の頭に張り付いた老人のしわだらけの手を外そうと、少年は両手でそれに立ち向かったが、敵わなかった。

「お前のその目は、いずれ世に不幸をもたらす」

少年の左眼に刃をあてがいがながら、老人は無感動にしわがれた声で言った。

刃をあてがわれたその瞳は、色が無かった。

彼は恐慌状態のまま暴れた。

老人は、その皺と血管が見える細い腕で、がっしりと少年の頭をつかみ、彼の抵抗にも微動だにしない。無駄な抵抗であった。

「その前に、儂が潰してやるのだ」

「……ころさないで……！」

「殺しはしない」

老人は小さな掛け声と共に少年の左眼を突き刺す。

大きな大きな悲鳴が荒地に響き、風にのる。

「ああ、あ、あああああ……」

老人は短剣を少年の眼から引き抜き、彼を解放した。

少年は、かすれたうめき声をあげながら崩れ落ちる。

ポタリ、ポタリと血が荒地の地面に落ちた。

眼が熱い。やけるように『熱い』。

少年は潰された目の辺りを両手で覆う。ぬっとりとした感触と暖

かさが手を襲い、彼は気を失いそうになった。

そこに、潰されなかつた瞳に老人以外の人影が映る。

彼と同じぐらいの年頃の、子供。金色の髪の子供は、老人の

後ろで彼を見つめて口で笑みの形を作っていた。

「よく、気を失わなんだな……ルビニ」

遠くの方で老人の声がした。

「何故、元に戻っている？」

その翌日。

老人に眼帯を外された少年の眼は、すっかり元通りになっていた。

何処をどう見ても、傷一つ無かった。

老人、そして彼も驚くしかなかった。潰されて、半分になったは

ずの視界。それが広くなっている。

「……………」

だが、少年は喜べなかった。

「化け物」

金髪の子供がそうつぶやいた。少年には訳がわからない。ただ、

幼い頭でも、これから起きそうな事はなんとなく分かっていた。

そのことが少年に再び恐怖を抱かせていた。次第に震えが身体を支配していく。

金髪の子供のことなど、頭に無かった。

「こいつは、化け物なんだ。殺しちゃえばいい」

「お前は黙っている、レイトル」

クスクスと笑うその子供を老人は静かに黙らせた。

「殺してはならぬ」

老人は苦悩した風に言った。言葉を発しつつ、そこには苦味があった。

「本当は殺したい」とでも言うかのように。

「……潰しても元に戻るのなら……また潰すまで」

そうつぶやいて、老人は再び短剣を取り出した。昨日と違い、刃は鈍く光っていた。

「いや……いやだ……やめて……!!」

少年はへたり込んで、頭を抱えてかすれた声で請うように言ったが、それが聞き入れられることは無かった。

悲鳴がまた、荒地に響き渡った。

そして、次第に静寂がその地を包む。

……悪夢が、息を吹き返した。

*

ドレスト大陸の、遙か彼方。

小さな部族の、小さな村の小さな建物の中。小さく、簡素な部屋。毎日、数え切れぬほどの生物が死んでゆく中で、一人の老人の生がそこで終わろうとしていた。

その老人は横たわるベッドの中で、大きく呼吸をした。そして、枕もとに立っていた少年に視線を向ける。

立て付けの悪い窓が風でカタカタと鳴る。その部屋は、老人が感じているよりずっと寒かった。

「……っ」

少年は顔をゆがめ、老人の死の影が色濃い顔を見つめた。

「……儂は、もうすぐ死ぬ」

かすれて弱々しいその声に少年は何度も首を振った。

目には、涙が今にも零れ落ちてしまいそうなほどあふれていた。

少年はぎゅっと目を閉じ、大粒の涙を己の手の甲に落とした。

少年は老人の皺だらけの少し暖かい手を取り、やがて小さくつぶやく。

「……死んじゃうの……リエル……？」

老人は小さく頷いた。視線はもう少年ではなく、天井に向けられている。

「良いか……これからお前は一人になる……。儂、が……教えてきたことを忘れず……生きよ」

荒い呼吸の中で老人は言った。少年はまた激しく首を振った。自然と、つかんだ手に力を込める。

「生きるって……！僕……どうしたらいいかわからない！教えてよ、リエル！」

少年の叫びを聞いて、老人は目を閉じ薄く笑った。

「お前のしたいように生きればよい……レイトル」

「……！」

そう呼ばれて、少年は顔色を一変させた。涙で上気していた顔が一気に青白くなる。

次の瞬間には老人の手を払いのけ、ベッドから後ずさった。

「違うよ……！僕、レイトルなんかじゃない！」

少年が叫んでも、老人は動じることは無かった。せえせえと呼吸をしながら、老人は静かに言い放つ。

「ならば……お前は誰……だというのだ」

少年は答えられなかった。口を真一文字に閉じ、俯く。老人はそれを、彼がそれを認めたものとみなして続ける。

「僕はあの目をつぶせな……あの目が、世に破戒の……日が……」

老人の途切れ途切れの言葉を聞くことなく、少年は頭を抱えた。そして耳を塞いだ。

「……もはや……逃れられまいな……」

「……リエル？」

少年がいぶかしんで顔を上げたとき、老人は大きく大きく息を吐いて、小さくつぶやいた。

「これは……永遠……」

翌朝、風が身に染み渡るほど冷たい、静かな朝。

朝もやも晴れぬうちに、黒い葬送行進が黒い棺と赤い十字架を掲げ、小さな村の中に続いていた。

それらが通りすぎていく家々の玄関先にも、死者を悼む赤い十字架が掲げられている。

向かう先は、墓地。

明らかにただ通りがかった旅人に対するそれではなく、黒い装束に身を包んだ者たちが数多くそれに参列した。

顔は皆隠しているため、分からない。

しかし、老人を看取った少年らしき姿はそこには無かった。村の誰かが彼を探そうとしたが、見つからなかった。

その少年は葬送行進から離れた、村の一番高い所：誰かの家の屋根に立っていた。

上から見たその様子は、なんとも不気味で、恐ろしささえ感じる。少年は涙の後を残した顔でぶるつと震えた。

……もう一度、行進の中心にある黒い棺をじつと見つめる。

棺で眠る老人に小さく別れの言葉をつぶやいて、屋根から軽々と飛び降りた。

降り立った場所には、少年の身体より少し小さめの荷物。それを抱えて、村とは反対方向に歩き出す。

あの家を貸してくれたおばさんが、老人の最期を看取ったあと少年に「ここに住めばいい」と言った。

「大人になるまで面倒をみてやる」とまで言ってくれた。

少年にとってその言葉ほどありがたいと思ったことは無かった。だが、今、少年はその彼女に黙って村を出ようとしている。

この場所には、居られない。居たくない。

本人にも良く分からない、そういう衝動が、今彼を当ても無き流浪の旅の道へと導いていった。

……そう、終わらない旅への。

のぼり始めた冷たい朝日の光が、より空気を冷たく照らし、少年の影を伸ばしていた。

1章1節 前兆(きざし)

『お前は、自分勝手だ』

瞼の奥には、闇が広がっていた。

その闇の中であの声がこだまする。

あの時、あの場所で。あの人の口からつむがれた、その言葉。

自分をただただその目で見つめて。嫌味でも侮辱でもなく。

まっすぐに正直にのべられた、その一言。

「わかってるさ」

目を開くことなく、彼はそれに答えた。

やわらかい風が彼の髪と草を揺らし、それらは優しく彼の頬をなでる。

「分かってる」

静かな森の中。

聴こえるのは鳥と木の葉の声だけ。

木漏れ日が生き物達をちらちらと照らし、風がころころ笑いながら彼らをやさしくなでていく。

それに答えるように、木の葉が擦れ合う音がする。

やがて、鳥の声が遠ざかっていき、風が去り、木の葉が口をつぐんだ。

「……でも、分かってくれるよな?」

『お前は、何も分かつちやいないんだ』

彼は瞼の闇を閉じた。

*

彼は人の住む場所にたどり着くと、まず最初に行うことは宿探し、そのあとは酒場探しである。

どんな小さな集落でも、男達が酒盛りする場所はどこかにある。それが「酒場」と銘打っておらずとも。

酒が飲みたいのも勿論そうなのだが、一番彼を酒場という場所に吸い寄せるものは、人だ。

服や習慣、考えそして宗教が違ってても、皆で集まって騒いでいる

人々の顔は、何処で見ても変わらない。

生活の苦しさをそのときだけ忘れ、今その瞬間を歌い、飲み、楽しむ。

その雰囲気、どうしようもなく心を引く。

それは、長らく故郷から離れて湧き出る郷愁から出てくるものかもしれない。そう思うと、彼は自分の弱さを笑いたくなくなってしまふ。

今日もそんな様子で一人、騒がしい酒場の中にいた。

にぎやかなその雰囲気を楽しみながら飲んでいる最中、隣にいた気のいい男と妙に意気投合して一緒に飲んでいた。

「そういやにいちゃん、みねえ服装だが旅の人かい？」

彼の杯に景気よく酒を注ぎながら、その男は言った。

「うん、まあね……っっておとととと。入れすぎだよ」

酒……この町の特産らしいの麦酒の泡が、杯から溢れ出し、テーブルに白い塊を広げていた。

「おお、そうしみつたれたこと言うなよ、若いの！」

遠慮がちな彼に男は豪快に笑いとばす。その豪快さに彼も一緒に笑ってしまった。

そして、男の杯にも酒を並々と注いで、自分のぶんはひとくちであおった。

後ろで流れる音楽に口笛を鳴らして賞賛してから、自分の杯を見て男はまたにやりと笑った。

「うんうん！男気があるねえ！ いいちゃん、見かけのわりにや分かっただけじゃねえか」

そう男に言われて彼は苦笑した。

年の割にはやや童顔で、金髪にちかい明るい茶髪と青い瞳がより、彼の言う「男気の足りぬ」人間に見えたらうし、自分ではそう思っている。目の前の男は皮肉で言ったわけではないだろうが、やはり苦笑いするしかない。

「んーじゃ、男な俺らにカンパイってことで！」

二人で大声で祝杯の声を上げ、一通り男について語り合った。

後ろで流れる音楽の曲目が変わったのが三度ほどの時間が過ぎて、男は再び彼に尋ねてきた。

「なあ、にいちゃん。名前はなんてえんだ？ 俺は、カドサだ」

名乗られて、一瞬きよとんと阿呆面を見せた彼は次の瞬間肩を震わせて笑い出した。

「なんてこつた！ あんなに熱く語り合ったのに、俺たちはお互いの名前さえ知らなかったんだな」

そついやそつだ、とカドサも大笑いした。

「俺はメオ。よろしくな、カドサのおつちゃん」

そついうと、もう幾つ食べたか分からない煮豆を口に放り込み、

メオは杯に残った麦酒を一気に飲み干した。

カドサに教わったとおり、麦酒というものは喉で飲み干す瞬間がたまらない。メオはその感覚を大いに楽しんだ。

メオの飲みっぷりにカドサも喜び、何度も祝杯をあげた。

そのうち話は旅の話になった。

カドサが話を聞かせてくれ、と頼んできたのである。

どうやら彼は旅人が来るたびにひつつかまえて、ありとあらゆる旅の話をきいているらしい。

勿論、メオはカドサが知らないことも知っていたが、カドサもまた同様であった。

遠方のドーリア神聖王国のセパラたちのこと、歴史的名所、町が属する帝国内の反乱情勢や交易の話……

互いに互いの話を話していくうち、戦争の話になった。そのなかでふと思いついたようにカドサがこう言った。

「そついやにいちゃんよ、おめーさんの故郷は何処だ？ まさか」

「ん？ ルーデシアだよ」

メオは続けようとしたが、カドサの酒の入ってほんのり赤くなつた顔色がほんの少しだけ変化したのを見て、思わず言葉を止める。

カドサは一瞬、何かがよぎつたような顔をして、「そつか」と頷く。

そして何も言わずに一気に酒をあおった。
嫌な予感がした。

酒と長話で火照っていた身体から、だんだん血の気が引いていくのがわかる。

ルーンデシア。

メオの母国である、機械王国と呼ばれるその国はその名の通り「機械」という技術を生み出した、現在名目上立憲君主制とされているが、事実上王制をひく王国だ。

「機械」と呼ばれる技術を生み出しただけあって、その技術の発達状況は他国とはけた違いであり、それを利用した軍事力はドレスト大陸一、二を争うほどである。

その技術が他国に漏洩することを恐れ、時の王は技術者の出国を硬く禁じていた。

十年ほど前にそれは解禁され、現在は他国に徐々に技術が広がりにつつある。

「……どうかしたのかい？」

そう尋ねつつもメオの脳裏には戦争、という文字が浮かんでいた。戦いの話の最中のこの態度である。

この大陸は戦争が絶えない。

カレイア帝国やレパル朝の長きに渡る戦争、小国の小競り合いや民族紛争。

短い旅の中で、何度も戦場を見た。

それに、以前噂でルーンデシアの南、コピアニオン同盟連合の国々が怪しい動きをしているということを耳にはしていた。

住む人間が多いただけ戦争も多い、と誰かが言っていたのを思い出して、メオは更に気分が悪くなった。

カドサは知らない振りを決め込んだのか、何も答えなかった。なんでもないと言ったが、その口調は乱暴で、先程からの友好的な態度すらも変わり、よそよそしいものとなった。

メオから目を逸らし、横目でチラチラと見て妙に落ち着かない様

子だった。

何度尋ねてもとりつくしまもなく、メオはこれ以上訊いても無駄だと判断し、席を立った。

懐から多めに金を出して店の人間に渡し、こう言った。

「おっちゃん、ありがとな。楽しかったぜ」

「あ……ああ」

明るく笑うメオに戸惑ったふうに答えたのを見て、メオは苦笑した。

「礼におごつとくから。じゃあな」

それだけ言うと、メオはさっさとその場を立ち去ろうとした。

後ろから呼び止める声が聴こえたが、メオは無視して酒場を出る。いつもならそのまま遊びに行くのだが、彼はまっすぐにとつてあつた宿に戻った。

酔いはすっかり醒めていた。

簡素な宿の部屋に入り、就寝の時間になっても、メオの頭から未だ戦争という字が離れないでいた。

ベットの中に入っても落ち着かず、起き上がって枕もとにおいておいたカップの水を一口飲んだ。

夜の町はただただ静かだった。

その静けさが、耳の奥から音を引き出し、頭から余計な考えを引き出す。

熱心でやや偏りがちなエファロン教徒は機械をあまり好まず、それ故かの王国を嫌う傾向にある。

もしかしたら先程の男はその一例だったかもしれない。むしろ、そちらのほうが可能性が高いではないか。

そう考えたところで、一度浮かんだ文字を完全に消すことはできなかった。

基本的には、彼は楽観的な人間である。

しかし故郷にはメオのただ一人の肉親、母親がいる。そして、故郷に残してきた友人たち。もう会わなくなつて大分経っている。一

体、今どうしているのか。どうなっているのか。ひと月前に見た戦争の惨状が目に焼きついていているせいかもしれない。今まであまり考えないようにしていたのに、急に妙に胸が騒いだ。酒が醒めたと思ったが、やはり、酔っているのかもしれない。

ふと、窓の外を見る。

この辺りには2階建てくらい、3階建てのこの宿からは空がよく見えた。

夜空には星はほとんどなく、赤い月がこうこうと光っていた。

その赤さがいつもより、嫌に不気味に見えた。

(帰って、みようか。たとえ……)

そう考えてメオは首を振った。もう一度カップを手にとり、水を飲む。

(……まだ決まった訳じゃない)

何も知らない状態から、勝手に推測しているだけなのだ。

彼は寝巻きの胸の辺りを強く握り締めた。

もしかしたら、本当に先程の男がルーンデシア人が嫌いなだけかもしれない。

気になったらもう止まらない。知らないなら、知ればいい。

そうとなれば、情報を集めようと思いつく。今までは極力避けてきた。聞けば聞くほど帰りたくなるからである。だがそればかりではいけない。帰りたいと思つたところで帰れないが、不安に駆られるのは気持ちいいものではない。

まずはカレイアとルーンデシアの間にある、マルクトのルーンデシア側の国境辺りまで行って、「噂でない事実」を確かめる必要がある。

予定とはかなり違う。むしろ逆戻りになるが、止むを得まいと思つた。

もし戦争が起きるわけでないならば、それでよし、また進めばいい。

しかし、もし……

(やめたやめた！)

メオは両手で顔をはたいて、考えるのを辞めた。

今ルーンデシアから遠くはなれたこの場所でうじうじ不安がっていても仕方がない。

とにかく、進むしかない。進まなければ何も分からない。

そして、休まねば進めない。

休むためには今考えるのはよすべきだ。

そう思うことにして、彼は今度はブランデーを少し飲み、ベットにもぐりこんだ。

無理矢理瞼を閉じ、ふとんをかぶる。

……瞼の闇が開いた。

1章2節 おとしまえ

(やっぱり、考えすぎなのかな)

あれから二週間ほど経った。メオはカレイア帝国を抜け、マルクト共和国の帝国側の国境近くの町にたどり着いていた。

やはりいつもどおりに宿の部屋をとった後、宿屋と兼用である酒場にやって来ていた。情報収集の場としては、それなりにいい場所である。

もうすぐ夕方。酒場にも仕事を終えた町の人間が姿を現し始めている。

あれから色々話を聞いてみているが、王国について、彼が知りたいと思っている類いの噂はほとんどいっていいほどない。

『ルーンデシア？機械王国の。あの便利そうな国のことかい？』

さあ……別に何も聞かないけどねえ』

とカレイアでは誰に尋ねても、あまり関心のなさそうな回答しか得られなかった。

戦争がどうか言う問題ではなく、他国の人間がそういう認識を持っているというのが、別の意味で衝撃的ではあった。

うすうす感じていたのだが、目の前で言われるのとはまたそれは違うものだ。

ルーンデシアが機械技術が進んでいるのは確かだが、特段それを便利だと感じたことはないし、そこから離れても不便だと感じたことはなかった。

かの国とカレイア帝国とではあまり交流が盛んではないせいか、出入りの商人もあまり多くない。情報はそんなに多くなかったが、そのなかではともかく不穏な噂の類いは見つからなかった。

(……やっぱり、考えすぎなんだよ、な)

カレイアのはずれで会ったあの男……もう名前も臆げであるが、彼はやはり単にルーンデシア人が嫌いなだけかもしれない。

実際そういう人間に先日出会い、散々に罵られたばかりである。別に好き嫌い、信仰は本人の自由であるから、どうこう言うつもりはないが、面と向かって言われるというのはやはり、気分が悪い。

思い出して嫌な気分になったので、気晴らしに給仕をしている娘を眺めてみる。

店の娘が気付いたので笑みを浮かべて手を振ったが、彼女はじろつとこちらを睨んだ後、すぐに顔を背けてしまった。

(あらら……)

メオは苦笑いを浮かべて視線を自分の服に移した。自分が童顔であることはとりあえず頭の隅に追いやり、旅装の汚さを嘆くことにする。

(まあ、あまりこぎれいじゃないしねえ)

まだ旅をはじめてそんなに長いわけではないが、メオの格好はあまり綺麗とは言い難かった。

出来る限りの清潔を努めているが、白い服を好むのが悪いのか泥が少々目立つ。旅の間額につけていた青いバンダナもだいぶ色あせてきた。頭の後ろに手を回し、バンダナから伸びているコードを少しいじる。その先は腰に下がっている銃に接続されている。

(いい男が台無しだよなー)

やれやれ、と窓を見れば、空が段々暗くなってきたのがわかった。

旅の人間も二階にある部屋から降りてきて、町の男達もかなり集まり、酒場は賑わいだしてきた。

そのうち何処からか音楽が流れ出してくる。

この賑やかな雰囲気かメオは好きだった。この雰囲気の中で暗鬱な気分にいる自分が、妙に馬鹿らしい気がしてきってしまう。

(……でも、やっぱり国境近くまで行って様子を見ちゃおうかな) 見ても仕方のないことではあるかもしれないが、もはやメオはそうでもないし落ち着かなかった。

ここ二週間、集中できないせいも趣味の銃の研究も上手く進まない。

何となく、腰にさげている自分の愛銃をテーブルの下で確かめる。固くて冷たい感触。

「あつと……」

考え事をしていたせいか、注ぎすぎた酒が杯からあふれ出てテーブルに広がっていた。

麦酒の泡がふつふつと小さく音を立て、すぐに消える。

ぼんやりとそれを見つめた後、店の者に何かふくものを頼もうとした、そのとき。

人々の笑い声や話し声で賑わっていた酒場に、突然ものがひっくり返ったけたたましい音が響いた。

皆は口をつぐみ、一斉に音のしたほうに視線を集中させる。

メオも反射的にそちらに目を向けた。

そこには、大柄な男達が四人ほど。

テーブルはひっくり返され、その上の上のついでであろう杯や食べ物も床に無残にも散らばっていた。

(あらまあ、もつたいない……)

「てめえ、ふざけんじゃねえぞ！」

一人そう思ったところに怒鳴り声が響いたので、一瞬自分に言ったのかと考えてしまい、メオは思わず首をすぼめた。

四人の男達は大きな身体を振り上げてそれに見合ったかのような大声で互いを罵りあつた。

メオは酒がこぼれていることも忘れ、ただ啞然としていた。

その間誰も彼らを止めることはなく、それどころかそのままのおのの会話をまた始めだしたのだ。

メオにも止めるつもりはなかったが、店の客(ほとんどは町の者のような)のその様子にはすこしばかり驚かされた。何しろ、無関心なのである。見えていないのだろうか。

店の者は慌てた様子ではあるが、手を出しあぐねただその喧嘩を

見ているしかなかった。もつとも、仕方のないことであつた。屈強な大の男が騒いでいるのである。

すぐに男達の喧嘩はものの投げあい発展し、皿や杯、食べ物が酒場の中で飛び交つた。

さすがにこれには客達も騒ぎ出し、酒場は喧騒の渦にもまれ、男たちの周りにはほとんど人はいなくなつた。

彼らはお構いなしに、ついには男のうち一人がイスを持ち出し相手に向かつて投げた。

投げられた方は罵倒しつつ慌てて避ける。

そしてなんと重い、嫌な音が響いた。

運悪く、イスを投げられた男の後方の客のうしろ頭にそのイスが直撃し、イスはごとりと床に落ちた。

そのイスは大きくはないにしろ、木を削つてつくられたものである。音の重さから言つても、かなり重いようだ。

メオは痛さを想像して思わず額に手を当てる。

(もしかしたら死んだかもしれない)

男達は未だ罵りあい、ものを投げている。かわいそうに、と思つたメオは突つ伏したまま動かないその客を見つめた。

と。

突然、その客がすつと頭を上げた。

メオは目を見張つた。周りの客もざわつき始めていた。

その客は白い頭を軽く振ると、立ち上がつて足元の、先程彼に衝突したイスを片手で持ち上げた。

どうやら旅の人間らしい。見たことも聞いたこともないくすんだ水色の民族衣装なようなものを着込んだ、まだ若い男だつた。

メオからはやや距離があつたが、そこから見ても彼の身体は、背が高くとも暴れまわっている男たちと比較にならぬほど細い。

そしてその彼は軽々と片腕でイスを頭の位置まで持つていき……

投げた。

(えええ?!)

メオの目の中で驚きと共に、イスがゆっくりと喧嘩をしている男達の一人に吸い込まれていった。

程なくして、悲鳴。大きな身体が倒れる音もした。

「てめえ、何しやがる?!」

やられた側の男の仲間が怒気をはらんだ声で叫ぶ。

相手側はニヤニヤと笑っていたが、間髪いれず別の椅子が飛来し、そちらの方にも当たる。

あっという間に二人が倒れた。

店は静まり返る。

(あちゃー……)

メオは何ということも出来ず、溜息をついた。

「お前らがやったから、やり返したまでだ」

二つ目の椅子を投げたその若者は、手を軽く払いながら淡々と言う。

「文句あるか」

そんな馬鹿な。

そこにいる誰もが思ったに違いない。

残った男達はただ呆然としていたが、はたと気付くと、よくわからない大声をあげながら若者に飛び掛った。

同時に再び酒場にざわめきが生まれる。

目にも止まらぬ速さで若者は男を蹴り倒した。その衝撃を受け止めきれなかった男は吹っ飛ぶ。

そして、あるうことかメオのテーブルに飛んできた。

「うおっ!」

麦酒でべたべたに濡れたテーブルにだ。

メオは慌てて避けたが、嫌な音を立てて男は頭からテーブルに突っ込み、木製のテーブルは無残にも割れた。

周りの客は悲鳴をあげながら逃げる。

それを目の端に見た後、若者は残りの一人がとばした拳を避けずかかさず顔面に蹴りを入れた。

彼もまた吹っ飛んでいった。けたたましい音と悲鳴が再び酒場に響く。

倒れこむ衝撃に、店内が揺れたような気がした。

その様子もきちん確認すると、若者は足についた埃を払い、ふん、とだけ声を漏らす。

店の中にいたものは、皆言葉も無くその光景を見つめていた。

酒場の中は、異様な沈黙。

その中で一人立つ、銀髪の若者。

メオは彼を見つめながら、少し笑った。

これが、正確に言えば彼との出会いだった。

1章3節 節介

酒場で起きた乱闘騒ぎの顛末は、意外なものだった。

細い身体をした若者が頑丈そうな四人の男をのした後。

酒場の異様な沈黙を破るかのように、突然何かが落ちる音がした。全ての視線がそれに向かう。

それは床をすべるように転がり……

「いてっ！」

メオの足に当たって止まった。

そしてそれが止まったのを見計らったかのように、誰かが若者の方へ踊り出た。

その誰かはすばやく若者の手を取って、店の入り口へと飛び出す。若者が何かを言っているのが聴こえたが、よく聞き取れないまま、二人は外へと消えていった。

この間、数秒程度。それはめまぐるしく速かった。

メオは何とか見ることが出来たが、大半の人間には、何が起こったかよくわからなかったのではなからうか。

その人物がメオの横を通り過ぎる一瞬だけ、メオは顔を見た。

一瞬だったが、可愛いと思った。思い出して、すぐに首をかしげる。

（女の子？）

その人物は、若者の連れなんだろうか。何にしる、速すぎてよく見えなかった。

（まあいいか……）

若者ともう一人の誰かが消えて、酒場は次第に賑わいを取り戻しつつあった。

先程と違うのは、賑わいの中に食器を片付ける音と掃除をする店員の話し声がわずかに混じっていたことくらいで、伸びていた男達も運び出されたのか、もういない。

まるで何事もなかったかのような雰囲気だった。

最初から。

いぶかしんだような顔がいくつかちらちらと見えたが、それは服装から見て、この土地の者でない旅人たち。

そのとき、メオはその理由になんとなく察しがついた。そんなものだと言われてしまえばそれまでの、些末事なのかもしれない。

居心地の悪さを急に感じて、一人で下を向き苦笑し、溜息をつく。そのとき、先程足にぶつかった物が見えた。

あの脱走劇……と言つべきか分からないが、あれを見た衝撃のせいか、その物の存在をすっかり忘れていたようだった。

他の客達も忘れたようで、メオのことなど目もくれていない。それに手を伸ばして拾ってみる。

妙に重い、黒い筒。見覚えの多いそのつくり。

「……銃？」

*

町から少しはなれた、小さな森の中。その中の小さな洞穴。

風はなく、ぱちぱちという音だけが洞穴に小さく響く。

そこに座り込んであまり大きくない焚き火にあたりつつ、やはり野宿は辛いということを思って、メオは街を出てきたことを少し後悔した。

あの後、もう飲む気にも遊ぶ気にもなれなかったメオは、銃をしまい、置き去りにされた若者の荷物を持って酒場を出た。

彼らを若者の銀髪を目印に探してみたが、当然の如く見つからなかった。

(何やってるんだか……)

メオはその街に留まらず、夜になる前にそこを出た。

宿に泊まるつもりであったが、やめてしまった。不審げな顔をしていた主人の顔を思い出して一人笑う。

この荷物と、転がって来た銃。それらに、ちょっとした好奇心がある。

だからここよりよっぽど安全であり暖かいはずの町を出て、こんなことをしているのだ。

自分でも不思議に思いながらも、懐から先程拾った拳銃を取り出して眺めた。

メオは銃の知識を故郷で覚えた。小さい時から銃をいじったり集めるのが好きで、故郷を離れて旅をしている今も、暇さえあれば銃の研究をしている。

今、傍らにある愛銃はその研究の試作品だった。

明かりが乏しいので充分には見えないが、片手に収まるほどの大きさと重さから、その拳銃の型はロムサリオだと分かった。口径は小さく、殺傷能力は大きくないが、片手で簡単に扱える銃だ。服の下にも忍ばせることができる。

(多分、ルーンデシア製だ)

銃の銘が刻んである場所を指でなぞりながら、メオは嫌な予感に襲われた。

ロムサリオ程度の銃であるならば、周辺諸国……特に隣国のこのマルクトに広がっていたとしてもおかしくはない。見たことはないが、恐らくカレイアにも売っているだろう。

そのはずなのだが、それは妙に彼の胸を騒がせる答えであった。それから少し離れたところに置いた、あの若者の荷物に目をやっ

た。

本来ならば酒場に預けておけばいいのだが、恐らく彼らはもうあそこに戻らないと踏んで、持って来ていた。もしかしたら彼らに会えるのではないか、といった、ちよつとした好奇心があった。その後彼らを捜してみたりもしたが結局見つからず。もしかしたら、と思つて今、彼は街の外にいる。

その『彼』の荷物。中は見ていないが、その軽さからほとんど何も入っていないように思えた。

焚き火から少し離れたそれは、ゆらゆらと大きな影を地面に落としつつ、闇に溶けかけていた。

(ほんんと、何やってるんだか)

メオは溜息をついて、今度は自分の手荷物から食糧の干し肉を取り出した。

できれば軽く火にあぶつて食べたいところだが、焚き火の火の小ささを見て諦める。

干し肉のその硬さに嘆きつつ噛み千切っていると、不意に小さな音が洞穴内に響いた。

岩場を踏みしめた音。足音。

干し肉をくわえたまま、視線を洞穴の入り口にすえ、メオはゆつくりと傍に置いてある愛銃に手を伸ばした。

もう一度、足音。今度ははつきりと入り口から聴こえた。黒い人影もうつすらと見える。

(物取りだったらやだなあ)

メオは愛銃をしっかりとつかみつつも、暢気に構えていた。更に足音。

そこで、ようやくと小さな明かりがその人影を照らした。

「……あ」

そこには、あの時まで見たことのなかったくすんだ水色の服に、草色の布を巻いている、銀髪の男が立っていた。

たいまつの光の加減で赤がかったはいたが、酒場で見たあの若者

に間違いはなさそうだった。

顔の左半分は髪で隠れていた。残る右の方には、赤い瞳。

じっと見てくるメオに不快を感じたのか、若者は眉をひそめた。

そしてその場から立ち去ろうとまた入り口の方へ身体を向けた。

「あ、ちょ、ちよっと待って」

それを慌ててメオは止めようと両手を上げて立ち上がった。片手に銃を持っていたのをに気付いてすぐに地面に置く。

若者は怪訝な顔をして振り返った。

「あんた、セーナリオの宿屋の下の酒場にいただろ？」

セーナリオとは、メオが夕方発った国境近くの街の名前だ。

メオをじろりと見た後、若者は軽く頷く。

「俺もいたんだよ、そこにさ」

今度は目を細める若者に、メオは座るように勧めるが、彼は表情を変えることなく、その場にとどまる。

メオは若者の荷物を持ち主に渡しながら、話し始めた。

「はい。あんたの荷物。置き去りにされてたから、持ってきたんだ」

「……？」

若者はますます怪訝な表情を深めつつも、中をゆっくりと確認し始めた。

やはりあまり入ってはおらず、すぐに彼は頭を上げ、こう言った。

「何故お前が持っている」

当然の問いではあった。メオは小さく笑って答える。

「あんたに会えそうな気がしてたからさ」

(勘だけどね……)

軽く目を見開く若者を尻目に、メオは心の中でそう付け足した。

「そうか……礼は言っておこう」

視線の中の疑いを消すことなく、若者は言った。その様子にメオは苦笑して軽く手を振った。

それから、酒場での立ち回りの話をふったり、もう一人……若者を連れて行った人物(多分、女の子だ)のことをたずねたりしたが、

若者はそれについて話すことが不快だったようで、答えることはなく、目つきの悪い目がますます悪くなった。

そのうち不意に若者は立ち上がり、そのまま洞穴を出ようとした。「あちよつとちよつと！これから何処に行くつもりだい？」

後ろから声をかけられて、若者ははうざったそうに振り向く。

「外だ。うるさくてかなわん」

「外は寒いし、焚き火に当たっていけばいいのに」

そう言つて、メオは小さくなりかけていた焚き火に慌てて拾つてきた木の枝を放り込む。それを行いつつ、メオは付け足した。

「あとさ、俺は目的地を訊いているんだよ」

若者は振り返つたまま動かなかつた。

「……何故言つ必要がある」

ややトーンを上げた声で若者が尋ねた。

「同じだつたらさ、一緒に行きたいなーって思つただけだ。駄目かい」

彼はメオとその周りのものを観察するかのようじつと見つめる。

「この辺は俺の故郷が近くてさ、地理には詳しいんだ。よかつたら案内もできるし。ここで会つたが何かの縁じゃないか」

見つめる赤い瞳を正面から受け止めてにつこりと笑い、さらに若者に畳み掛けた。

彼は答えずメオをもう一度一瞥した後、やつと口を開いた。

「……とりあえず、ルーンデシアに行こうとは思つている」

（お、当たつた）

指を鳴らしたい気持ちを押さえて、メオはまた若者に笑いかけた。

「そうなのか。実はさあ、ルーンデシアは俺の故郷なんだよ。ま、事情があつてそこまでは行けないんだけど、途中までならばうちり案内できるんだけど」

それを聞いていたのか聞いていなかったのか。

若者は洞穴の入り口の方へ行き、そこに座りこんだ。焚き火に当たるように再び勧めたが、これもまた拒否された。

「うるさいと言ったろう」

(そんなにうるさいかな)

少し首を傾げつつ、ふと思い出したように若者に尋ねた。どうも最近、これを訊き忘れて会話をしてしまうようだ。

「そっぴや名前、何ていうんだ？ 俺はメオ」

「……エラインだ」

「これも何かの縁だ、よろしく！」

そうにこやかに笑って手を差し出したが、エラインと名乗った青年は無言で顔を背けた。

(それなりに、アタリはつけたけどさ)

洞穴の入り口で座り込んで静かになったエラインを眺めつつ、メオは肩をすくめる。

彼は、自分が起きている限り眠ることはないだろう。メオは不思議と彼ほど警戒する気にならなかった。ほんのさつき出会ったばかりの見ず知らずの人間なものにもかかわらず、だ。

たぶん、とメオは思う。

……彼自身が、とても自分を警戒しているからだろう。そちらの方が、むしろ自然かもしれないなどと思いながら、彼は堅い干し肉を噛みちぎった。

1章4節 寡黙

翌日。

結局二人は一言も口をきくことなく、一夜が過ぎていった。

メオは目を覚まして焚き火の後始末を済ませると、洗面をすべく立ち上がる。

狭い洞穴の入り口には、エラインと名乗ったあの青年がこちらに背を向けて座ったまま眠っていた。

もう朝だということを告げようと、肩を叩く。

「!?!」

その瞬間、メオのみぞおちに肘が叩き込まれた。

メオは訳もわからず、腹に入った衝撃に手で押さえながら咳き込む。

見上げると、そこにはダガーを抜き放った銀髪の男…エラインが立っていた。

彼は困惑していた。メオは咳き込みながらもなんとか声を出す。

「な、なにするんだよいきなり…」

「悪かった」

ダガーを鞘に収めながら、彼は素直に謝った。

しかし、後ろから何も言わずに寄って来るな、と付け加える。

それにメオはきよとんとした顔をした後、小さく苦笑した。

「気をつけるよ。そんなので刺されちゃたまらないし」

とつさに腹筋を入れて痛みをやわらげようとほしたものの、先程の強烈な一撃は今朝の朝食を受け付けなくさせるには、充分なものだったようだ。

メオは腹をさすりながら、近くの泉に足を向けた。

朝霧と静寂に包まれた森には、少しずつ日差しと鳥の音が差し込んできていた。

泉には、それが安全な水であることを示す白い花が咲いていた。

それを確認してから、メオは泉の水を飲み、洗面をし始めた。

（赤い目……か）

顔を洗いながら、メオは先程のエラインの様子を思い浮かべる。赤い目を持つものは、エファロン教の教えの影響が大きいこの大陸では、酷く忌み嫌われている。

何でも、主神エファロンに刃向かった悪魔が赤い目をしていたところからくるものらしい。

メオはエファロン教徒でもなければ赤い目を持つ人間を忌み嫌う人間でもなかったので、別段気にはしていなかった。

むしろ、ばかばかしい迷信だとさえ思っている。

ただ、旅に出るから赤い目を持つ人間を見たのは初めてであった。夜見たときよりもはつきりと見えた、彼の目。

彼の目の色は……そう、とても暗い赤だ。

（話には聞いたこともあるし、故郷にも、結構いるけど……）

メオは顔をはたき、布で拭きながら洞穴に戻った。

あんな色は、見たことがなかった。

「で、さ、一緒にいるってことは俺の案内受ける気になったってことかな？」

「……………」

「沈黙は肯定ってやつ？ 照れ屋さんだなあ、あつ、ちよつ、蹴らないで！」

風に揺られる木の葉のささやき声、心地よい木漏れ日。空はまばゆいほどの快晴。

今日は珍しく気持ちのよい日だった。

森の中の小さな街道をにそって、彼らは歩いていた。

エラインは、とにかく寡黙だった。

色々話し掛けてはみたが、昨日と同様、無視するか適当に相槌を打って話を切っただけ。並んで一緒に歩いてはいるが、彼は一人

で歩いているかのような振る舞いだった。

何しろ歩調が早い。少し気を抜くと置いていかれそうになる。

メオは少しつまらなくなってきたので、ここはひとつからかってみることにした。

「なあなあ、えーつとーなんだっけ」

「……………」

「あ、エツちゃんだ！」

「違う」

唐突に声をあげたメオにエラインは怒りも顔に否定した。それに何故、とでも言うようにメオは首をかしげる。

しかし顔も目も笑っているのは、メオ自身も自覚していた。

「え、だってエラインって名前だろ？ だったらエツちゃんじゃないか」

「どこをどうしたらそうなるんだ」

「エラインの頭のえをとってエツちゃん」

「そんなことは分かっている。気持ち悪いからやめるそんな呼び方」

「いーじゃん、呼びやすいし」

もう良いとばかりに彼は再び黙った。

不機嫌そうな顔は、眼光がするどくなりますます不機嫌さを増していた。表情がほとんど変わらないので、単にそういう気がするだけかもしれないが。

メオはその様子に苦笑しつつ、話題を変えることにした。

勿論、エツちゃんという呼び方を変えるつもりはなかったが。

「そついえば、エツちゃんはルーンデシアについての噂、なんか聞いてない？」

この二週間、何度尋ねたか忘れるほどした質問をする。

「……………どういった？」

『エツちゃん』という呼び方にやや眉を吊り上げたものの、その質問に興味もなさそうにエラインは訊き返す。

訊き返されてメオは少し困ったが、何とか言葉をひねり出した。

「んー……例えば、戦争……とか」

エラインは首を振った。

「そうだったものは聞かん」

「そう……か」

いきなり暗い影を落としかのようなメオの様子をみて、エラインは何を思ったのか、こうつけたした。

「仮に戦争が起きていたとしたら、隣国のこの地に影響が無い筈がないだろう」

エラインのその意外な言葉に、メオは少し目を見開いた後、小さく笑った。

彼にしてみれば、話を切ろうと思って言ったことかもしれないが、メオにしてみれば不安を少しでも和らげる、ありがたい言葉であった。

「……そうだよな、うん。ありがと、エツちゃん」

(ほんとに、そうだといんだけどな)

礼を言ったメオを不思議そうな顔をして横目で見つつも、エラインはもう何も言うことなく、黙々と歩きつづけた。

その様子に、メオはこっそりと苦笑する。

それから彼は懐から地図を取り出し、風に飛ばされないように注意しながら、現在の位置と次の街の場所を確認した。

空を見上げると、まだ日は東。朝になったばかりだ。

距離からして、このまま歩いていけば日暮れまでには辿り着けそうだった。

1章5節 月の見える街1

アンカイラ。

マルクト共和国の西側の国境辺りに位置する、月の名所と歌われる地。

セーナリオの街のすぐ隣、一日ほど行程を行ったところである。

ここは不思議な場所で、雨が少ないわけでも風が強く吹き付ける場所でもないのに、空が幾分他の土地と比べて澄んでいるところだった。そして、すこしだけ、他の土地より月が大きく見える。主神エファロンが月を恋しがった場所だとか、そういう伝説がいくつかあるが、何故そうなのかは誰も知らない。

そういったちよつとばかり神秘的な場所であるアンカイラは月が美しく見える場所であると同時に、貴族や、貴族をパトロンとする芸術家たちの保養地としての側面も有していた。

季節の頃合がよければこの街は昼夜問わず、観光客や彼ら目当ての屋台、店が賑わいを見せるが、まだ時期の初めの頃は、そこまで人がいるというわけでもない。

幸いなことに、宿に困るということにはなかった。

いつもなら高く泊まれないような宿も、中流くらいであれば値も下がっており、メオは少し贅沢して泊まることにした。

というより、この町の宿は比較的安い値段で泊まれるらしい。メオは一部屋をエラインと折半してとった。当然の如くエラインは嫌がったが、部屋にはベットも二つあるし、一人にはやや広いものだ、それに折半した方が金銭的にも良いとメオがなだめて、渋々彼はそれを了承した。

宿帳へ記入を済ませ、荷物を置くために部屋に入ってみると、確かにベットは二つあり、部屋は一人で使うには広いものであった。

さすがに風呂はなかったが、窓の向こうにバルコニーが備え付け

られているのが見える。

(やっぱり観光地だね。設備が違うわ……)

後で聞いた話だと、メオたちの泊まった宿はこの町全体から言えば中の下くらいのランクらしい。高級ホテルというものが、一体どんなものか。あまり想像すると悲しくなるので、メオは考えないことにした。

いつもするように、荷物を置き酒場に出て夕食をとった。

その日はエラインと一緒に飲んだ。彼は、話し掛ければ答えてはくれたが、自分から話すことはなかった。

からかうと今度は本当に怒ってしまい、エラインは席を立つてとと外に出て行ってしまった。

怒ってはいるものの、彼はどうやらメオの道案内をするという提案に乗ったらしく、説き伏せたものの宿は折半しているし、その宿に荷物もおかれたままだ。時折警戒する素振りも見せるが、メオと共に宿を取ることに彼なりに利益があると踏んでいるのだろう。

マルクト共和国あたりまでくると、赤い瞳の人間に対しての偏見や締め付けといったものはだいぶ減っているようだ。しかし、それでも宿に泊めるのを渋る者は多い。同伴者がいれば、それなりに融通が効く。そんなところかな、とメオは思っていた。

メオはいつもより早めに切り上げて、遊びにも出ずに宿に戻ることにした。

部屋に入るとエラインはまだ帰ってきていなかった。やはり荷物は置かれたままだ。

どこに行ったのかとすこし苦笑しつつ、メオはすぐに夜着に着替えてベットにもぐりこむ。

あの日以来、どうも遊びに行く気が起きない。懐具合の心配もあるが、遊びに行きたい心境になれないせいだらうと、メオは自分でもわかつてはいた。

寝台に横たわりつつも、目は冴え渡っていた。一日歩きずめで疲れているはずなのにどうも眠れない。

小一時間ほどベットの上でもぞもぞとしていたが、やがておもむろに起き上がった。

(少し夜風に当たろう……)

窓を開き、バルコニーに出る。

ここの宿の部屋は二階。ちょうど窓側にはそれ以上の建物がなく、見晴らしが良かった。

外は暗かったけれども、空には赤い三日月が輝き、地には街の家の明かりがまだほんのりともっていた。

その夜景は美しかった。しかし赤い月にはエファロン教徒でない彼でさえ、少し不気味さを覚えてしまう。

「まこと、アンカイラの月は美しい」

「……?!」

突然背後から聞こえた声に驚いて、反射的に振り向く。

メオの背後……つまりは部屋の中……に見知らぬ者がいた。

暗くて顔までにはつきりとわからなかったが、それは立っていたのではなく……浮いている。

赤の月明かりにうつすらと映し出されたその姿は、異国風の白いマントとターバンに包まれていた。

「誰だ……?」

メオは声が聞こえるまで、それが背後にいることに全く気付かなかった。今、信じられないほどの存在感をこちらにあたえているというのに。

まるで

(そこにいきなり現れたみたいだ)

「君がそれを知ったところで、何の意味もない」

メオの問いにそう答えて、彼は肩をすくめる。

「君は何も知らないし、教えたところで理解できないだろうから」
そのまるで何もかも知っているかのような言い振りとうつつすら笑った顔に、メオはただ不気味さを覚えた。突然現れて、この余裕な態度はいつたいなんだというのだろう。物盗りとも思えない。

「……じゃあ、名無しのゴンベサン。人の部屋に入り込んできて一体何の用なのかな」

口調は軽かったが、メオは警戒は解かず、やや引きつった顔をしてその侵入者を見据える。腰に手をやりかけたが、得物はベツトの上だったことに気づき心の中で舌打ちをした。

そんなメオの様子を面白そうに眺めながら、彼は答えた。

「用？ ……そうだね……見に来ただけ」

何を、と尋ねようとするメオを、彼は見つめたまま手で制す。

「言っただでしょう。教えたって分からないだろうって」

余裕たつぷりの謎めいた物言い。実際、何がなんだかさっぱりわからない。

彼は目を細めてメオを見つめたまま、言った。

「なるほど……君は型があったというわけか」

「型？ 一体何の話をしているんだ？」

「そのうちわかるさ。否が応にも」

問いかけくるメオをやはり面白そうに見て彼は笑みを深める。

そして、身に纏った白い 今は暗さで濃い灰色がかった マントをふわりと翻した。

「それより、身の安全を心配した方が良い。

来たよ……君を屠る者が」

彼が言い終わらぬうちに、背後に悪寒がするほど冷たい気配を感じたメオは、とっさに身をかがめる。

何かが真上を通り過ぎていき、部屋の向こうで硬い音を立てた。

メオはその音を聞いた瞬間それが何であつたかを認識し、すぐに体勢を立て直して部屋に入り、愛銃を手に持つ。それから付けていた部品を無造作に外した。これを付けた状態は接近戦には向かないし、第一に威力が大きすぎて街中では使えない。

彼は窓側の壁に張り付き、窓の外を慎重に確認しようとした。

顔を出した瞬間、再び空を切つて何かがある、今度はメオの鼻先を掠めていった。

床に刺さつたそれは、矢。

次々とそれは打ち込まれていき、やがて止んだ。

しかしメオはそれで気を緩めなかつた。今度は安全装置を外し、窓際にしゃがみこんで銃を構える。

メオには何が起きたのかはよくわからなかつたが、矢を放っている誰かが、自分の命を狙っているらしいことはわかつた。

(命を狙われる覚えはないんだけど)

ふと部屋を見回すと、先程までいた「彼」の姿はなかつた。

どこに行つたのかと考える暇もなく、窓際の床から影が生えているのが目に入った。

1章6節 月の見える街2

赤い月の柔らかな月明かりに照らされて、窓から人の影が伸びているのが見えた、その瞬間。

メオは壁際から窓の方に転がり、その影の主に向かってトリガーをひいた。

するどい銃声が夜の街に響く。

しかし窓には誰も居らず、放った銃弾がバルコニーに食い込んでいるだけだった。

「！」

後ろを向く暇などなかった。頭で考える前にメオは今度は横に転がる。

何かが空を切ったのを後ろ頭に感じて、背筋が凍ったが、すぐに体勢を整えて立ち上がってそこにいるものを認識した。

そこにいるのは、黒い影。

全身黒づくめで、顔ですら目の辺り以外は黒に包まれており、その左手に握られた短剣がいやに生々しく光っていた。

メオは誰何しなかった。いや、そんな暇はなかったというべきか。その『影』は一瞬目を合わせるとすぐに第二撃に転じてきた。

それはメオのほうに下から上へと短剣を走らせる。それを何とか避け、メオは窓の外の方向へ足を向けた。

助走なしにバルコニーの手すりの上に飛び乗り、そのまま宿の屋根の方に飛び移る。

この部屋の中では狭すぎる。

ロムサリオほどの小型銃なら接近戦に向いているかもしれないが、今手にしているこの銃では相手の短剣には多分太刀打ちできない。

しかも、相手は彼よりも確実に速く動ける。あれほどの至近距離で銃弾を避けてしまうような相手……人間業ではないと確信できる……に對し狭い中でやみくもに銃撃したところで、当たりもしなければ

ば避けられてそのまま短剣の一撃を食らうだけである。

メオは、先程の銃声で街の人間がやっつくことに期待していた。闇討ちしてくる人間は騒ぎを起こされるのを嫌う。今、宿に泊まっている人間はおるか、周辺の住民が気付いている可能性が高い。夜に銃声が響くような街ではないからだ。騒ぎを大きくはしたくないが、自衛のためである。

(あとで面倒だけど)

もっとも、他人を無駄に巻き込みたくはない。流れ弾が誰かに当たってしまったわないとも限らない。

嫌な気分を襲われていると向こう側が屋根の方に飛び移ってきた。着地するのを狙って今度は足を撃ったが、すんでのところで避けられる。

そして避けた勢いでこちら側に跳んできた。手には先程の短剣と、もう一本の短剣。

慌てずそれを避け、また着地したところを狙って撃つ。今度は相手方の太腿にかすただけだった。

すかさずもう一発撃ったが当たらず、相手は片方の短剣を投げってきた。メオは身をかがめてそれを避け、それから後ろに少し跳んで相手との間合いをとる。

「なかなか、良い腕をしているようだな」

黒い影の一部を風にはためかせながら、それはくぐもった声ですうつぶやいた。

声からして、男。赤の月を背にしたその男の体は細く、その目は獲物をしとめるべくぎらぎらと光っていた。色は暗くて分からない。ただ、わずかな明かりに反射した光だけが彼に届いていた。

「もっとも、これぐらいでなければ甲斐というものもない」

短剣は左手に握られたまま。メオも警戒は解かず銃を構えている。「あんたは誰だ」

こんなことを短い時間で二回も言うとは、メオは思っていなかつ

た。

「俺に何の用がある？」

「挨拶、といったところだろうか」

メオの言葉を遮って、影は目を細めながら言った。口は布に覆われていてわからないが、多分それは笑みの形に歪んでいる。

「メオムスラディア、お前に警告する」

もう一年以上呼ばれていなかった姓名をその影の口からつむがれた時、メオの顔に明らかな動揺の色が生まれた。

「故郷に戻るがいい。肉親を思うならばな……」

「?!」

今度は全身に動揺が走った。肉親。故郷に残してある、たった一人の母。

戦闘中において、動揺するということは場合によっては命取りになる。わかっているとしても時に人間は動揺をする。

メオに少なからず隙が生まれた。それを影は逃さず、言い放った後間合いを一気に詰め、再度切りかかってくる。

それにメオは反応するのが遅れた。

銃を何発か撃ったが当たらない。

目前に迫る鈍く光った刃がゆっくりとした動きのように思える。

狙いは……腕か。

かわそうと身を捻じらせようとした。

しかしそれでは間に合わないことは頭ではわかっていた。

ぼやけた視界を切り裂くかのように、メオの左から何かが空を斬

って飛んできた。

それが命中する前に、男は大きく後方に下がった。ただ去っていくそれを目で見送ってから、飛んできた方向をみやる。

メオの鼻先を通り過ぎたとき、一瞬だけ見えたその形……ダガー。メオもまた飛んで来た方向に視線を送る。

隣の建物の屋上に、人影があつた。そこにいるのは……暗くてよく見えないが、見紛うことない銀の髪と変わった服。

「エツちゃん！」

メオは喜びや安堵の声というよりは、驚きの声で彼の名を呼んだ。正直、エラインが助けてくれるとは思わなかつたのだ。そして同時に、メオは彼を巻き込んでしまったという負い目も感じる。

メオの声に反応することなく、エラインは影に向かって続けざまにダガーを投げた。影はそれをやすやすと避ける。

「エツちゃん、無駄だ！ こいつは銃弾も避けるぞ！」

残りの弾を油断なく確認しながら、メオはエラインに呼びかけた。が、エラインはそれが耳に入っていないかのごとく何も答えず、ダガーを放ちつづける。

「どうした？ もう終わりか」

投擲するものがなくなつたのかエラインがそれをやめると、影は面白そうにそう言う。

周りの建物の壁には外したダガーが何本か刺さっていた。

それをちらりと一瞥した後、影は何本目かの短剣を取り出し、構えた。

「終わりです！」

「……！」

突如背面から発せられた予想外の高い声に、影は驚いて構えをといて背後を振り向く。

影の後ろ……メオの前方には、月を背にし、長い棒を振りかざした人間がいた。

顔は、よく見えない。シルエットからして髪の長い……女。

影はそれを避けるべく左に移動したが、一步遅かったか、勢いのつけられた棒は彼の右腕に命中する。

ごきりと鈍い音がした。

影は声も上げずに更に少し、左に移動した。

そこに立つのは少女。長い棒を両手に構え、顔は『影』に向かつていた。

その『影』は誰であるか分かったふうで、当てられた腕を押さえつつフンと鼻を鳴らし、言う。

「先程の小娘か」

「逃しませんよ！」

やわらかな、しかし厳しい声で少女は言い放った。

敵か味方か、どちらにせよ影とは敵である様子だった。加勢になるのはさておき、多分に有利にはなれる。

彼はもはや南中を終えた赤い月を尚も背に背負ってこちらの様子をうかがっていた。

まるで笑っているかのように目は細められている。

この男を捕まえて洗いざらい事情を吐かせる必要があった。分からないことだらけの状況を打開するために。今のところは三対一、やって出来ないことはなさそうだった。

「これは形勢が危うい」

余裕のたつぷりある声で、三人を見回し彼はそう言った。

右腕はあらぬ方向へ途中から曲がっていたが、気にした様子はなかった。

「もはや事は成した……我は去ろう」

そう言った後、一瞬彼の輪郭が歪んだように見えた。不思議に思ったメオが目をこすってよく凝らしてみると、確かに影の姿は揺らいでいる。

そして段々薄れていく印象を受けた。

いや、実際に今この視界から、彼の姿は薄れていつている。

(魔法か?　くそっ)

「待て！」

彼の姿が薄れていく中、その時初めてエラインは声をあげた。

「一体何のことなんだ?!　答える！」

(……?)

メオはエラインの発言に少し首をかしげる。

エラインも、彼女も。この「影」と何らかの接触、関係があったのだろうか。

そんなことを頭の片隅で考えていると、今度こそ、「影」ははつきりと笑った。声を上げ、黒に包まれた顔を少しのけぞらせて。

『機械の繁るかの王国に足を向けよ。　さらば自ずとわかるうも』

『の』

頭に響くような声を残し、そして影は消えた。

残されたものは彼の落とした短剣のみ。

それを見、エラインと少女を一瞥した後、メオは顔を空に向けた。

赤い月が、雲のない静かな西の空で不気味に輝いているのが目に映る。

街は不気味なほど静かであった。

2章 序 接触

五百年前、あの声を聞いてから。
僕と、その周りの人たちの人生は大きく変わった。

『アーネスト』

それは僕の名前。
はるか昔にその名の重みは変わってしまったけれど。
その名を持つ僕自身ですら、変わってしまったけれど。
僕がアーネストであることは、死ぬまで変わらない。
変わらない筈だ。

「アーネスト」

水のせせらぎだけが支配していた静かな白の間に響くは、涼やかな声。

もつずっと聞き続けて来て、慣れきつてもいいはずなのに。はつとするような、美しい声。

まるで夢の中でそれに呼ばれたような心地がして、彼は自分の名を呼ばれても暫く反応しなかった。

「アーネスト？」

「……何？」

もう一度呼ばれ、白の玉座に身をうずめていたアーネストはのろのろと顔を上げて返事をした。

玉座から離れた、階段を下りたところに声の主が立っていた。

もう彼と三百年の時をともにしている「クレーネのセパラ」……
…リララ。

アーネストと目があうと、彼女はそのゆるくウェーブのかかった薄い水色の長い髪を揺らして、微笑む。

ちりん、と髪飾りについた小さな鐘の音が静かなこの間にゆつくりと響いた。

「よかった。大丈夫？」

「……ああ」

気のない、草臥れたような彼の返事に彼女は少し顔を歪め、大丈夫なんかじゃないわ、と言った。

しかし彼はそれに答えず、再び顔を俯かせる。

「声が、聞こえた」

せせらぎにまじって、アーネストがぼつりとつぶやく。

「あいつの声だ」

そのつぶやきに彼女は答えることなく、ただじっと彼を見上げた。痛ましげな表情を浮かべて。

「笑ってた……笑ってたんだ」

彼は自分が震えていることに気付かなかった。いや、気付こうとしなかった。

ただ彼は、アーネストは白の玉座に深く座り込み、俯いているだけ。

「でも、あれを阻むものも、生まれている」

彼から滲みでるとす黒い負の気配が部屋を覆う前に、それを翻すように強く、しかしそれでいて静かにリララは言った。

「まだその力は微弱だけれど、育っていくわ」

彼女はアーネストが言う意味をすべて理解していた。これから起こり得ることも、それに彼が怯え……そして高揚していることも。

「だから……今はしっかりと休んで。来るべき……我らの使命のため」

そして彼女は子供に言聞かせるように、優しく言葉をつむぐ。

「わかってる……」

リララに言われてやっと落ち着きを取り戻したのか、彼の震えは消えた。

そして、沈黙。

白の間に流れるのは部屋の中に引かれている水のせせらぎの音だ

け。

白い衣に身を包んだ彼らは、お互いまるで彫刻のように動くことなく、しゃべることなく。

その間にゆっくりと溶け込んでいくようだった。

そう、わかっている。

僕らはそのためにこうして生きているのだから。

たとえ僕……アーネストが消えようとも。

使命のために、生き続ける。

2章1節 問いかけの答え

『君は』

金髪の少年は、何もないとところで白く笑った。
『君は一体なにをしているのかな』

銀髪の青年も、何もないとところに立って首を振った。

(俺が知るか…)

『何のために生きているの』

(知らない)

『だめだね、君は。やる気がないよ』

(うるさい…！)

銀髪の青年は俯いたまま耳をふさいだ。決して顔を上げることなく、少年と視線を合わせることもなく。

*

昨日いきなり「行き先が同じだし」と道案内を買って出た男メオ。

彼…… エラインにとってはそれは案内役というよりは、まわりついていたといった方が正しかった。

用もないのに気軽に話し掛け、つまらない冗談をとばし、拳句の果てに妙なあだ名をつけてくる。

宿も予算の関係上少々折半に応じた。夕食も一応一緒に取ったはいいが、メオはふざけた言葉を並べて彼をからかった。

昨晩から苛ついてきた彼はついに堪忍袋の緒が切れ、食事もそこに立ち上がり、メオを残して夜の街に出ていった。

(……撒くか)

メオ、という男と同行しても、嫌な気分になるだけだ。なら、今晚のうちに街を抜け出し彼を撒いてしまおう。

何も一緒に旅をする必要性があるわけでもない。あるはずもない。赤い月の光の下を歩きながら、エラインはそんなことを考えていた。

物心がついたところから旅の生活をしていた彼は、一人で旅することを好んでいた。誰かと途中一緒に旅をすることが今迄なかったわけではないのだが、そちらの方が彼にとっては気楽なもの。嫌な気分になるのなら、余計ににだ。

エラインはふと、立ち止まって周囲を見る。

人通りは多くない。商店街から離れたこのあたりの夕飯時は、そこかしこから様々な匂いがする。

窓から明かりのともった室内の家族の様子が見受けられた。

エラインは眩しそうに家々の窓を見て、再び当てもなく歩き出す。空を見上げるとそこには赤い三日月。無意識に、髪で隠している

左眼へ手を伸ばしかけたがすぐに気付いて止める。

やがてエラインは人通りもない、家の明かりもほとんどない裏通りに入った。狭い路地で、周囲は暗い。月明かりだけが頼りになるような、そんな場所だった。

エラインは夜中になるまでここに潜んでいるのも悪くはないかと思っただが、首を振ってやめる。このあたりは今はまだ時期ではないとはいえ月を売りにした観光地というから、夜中までやっている店など探せばいくらかは見つかるはず。

あの男……メオと鉢合わせることも多分ないだろう。それに、よく考えれば夕食をきちんと取っていない。

そう思い直し、ここから立ち去るべくエラインがきびすを返しかけた、その時。

「！」

背後に冷たい気配を感じ、彼は反射的に身をよじらせた。

次の瞬間、今まで彼がいた辺りの地面には数本の短剣が刺さっていた。

それを横目でちらりと確認した後、彼は間を置かずすぐに身をかがめる。

頭上に何かが通っていったのを身体で感じながら、いつの間に出したのか数本のダートを、短剣が放たれたであろう方向へと投げた。続いて響いた硬い音でそれが外れたと認識しつつ、今度は短剣を抜き放ち、両手で構えたまま勢いをつけて立ち上がる。

構えられた短剣は、刃の叩き付け合う鋭い音と共に頭上からの白い刃を受け止め、弾いた。

頭上から攻撃を浴びせてきた相手はエラインにそれを弾かれると

大きく後ろに跳び退る。

エラインは暗い中目を凝らして目の前にいる相手を観察した。それは暗闇に溶け込んでいるような黒い衣を細い身体に纏い、目元だけを覗かせている。両手には先程彼の短剣で弾かれた得物…タ イプは違うが短剣が2本…暗闇の中らちらと光っている。

明かりの少ない夜闇のなかその目元と刃物だけが浮かんでいるようにも見え、エラインは不気味さを感じた。

何者だろうか。エラインには心当たりはなかった。あるといえば… エファロン教徒だろうか。それとも物取りか。

「……何の用だ」

お互い微動だにせず暫くならみ合った後、エラインがぼつりとつぶやいた。あたりは不気味なほど、静か。

黒い影…それはわずかに見える目元を歪ませてから、それに答える。

「我はお前に、教えに来たのだよ」

声からして男。その男の声はくぐもっていて小さいものだったが、頭に響くようにはつきりと聞こえて来る。その声と仰々しい話し方は共にエラインには不快しか与えなかった。

「………？」

何を言い出すのかと思えば。全く訳がわからない。

エラインは黙したまま、しかし相手への警戒は解くことなく武器を構え、赤の片目で影を見据える。

一体何を、と口を開きかけると影がそれを遮って言った。

「お前は自分のことが知りたくはないか」

その言葉に彼は目を見開き、息をはつと飲み込む。動揺を隠すようにしてエラインの口は開かれた。

「………！ どういうことだ」

「何故お前は一人なのか、知りたいと思わないか？」

「………黙れ………！」

エラインは怒気のはらませた声を上げ、いつの間に出したのかダ

トを投げつける。

黒い影は小さく声を立てて笑いながらそれらを軽いステップで易々と避けた。

「お前が、一体何を知っているといるというんだ……！」

落ち着きを失いかけている彼を見て、影は目を細めた。まるで笑っているかのように。

そしてゆっくりと、口に巻かれた布を通して言葉をつむぐ。

「レイトル」

その言葉に、エラインは遂に動揺を隠し切れなくなった。

「貴様！ 何故その名を知っている!？」

「答える必要は、まだない」

影は両手の短剣を懐にしまった。

「我は、お前が知りたいことの手がかりとなるものは知っている」

「……どうということだ？」

「まずはメオという男と共に、行くがいい」

エラインはこめかみを引きつらせた。

(あのうるさい金髪男と、だと…?)

「機械繁る国、ルーンデシアに」

そう言つと、影は彼の目でも追えぬ速さで移動し、気付いた時は彼の遙か後方へ去っていつていた。

「待て！」

エラインは、その後を追った。自分の胸の奥でどうしようもなく高鳴る鼓動を抱えながら。

「エツちゃん？」

声をかけられ、顔をあげる。視線の先には声の主の金髪男……メオ……と、昨日の『お節介女』。

今は真夜中。場はとった宿屋の部屋の中。そこにいるのはエラインとメオと少女。

あの後、エラインは少女と出くわした。昨日出会った少女だった。しかし、彼はそれに構わず影を追った。エラインは彼を見失っていたので、不気味なほど静かな街じゅうを走り回った。

宿の周辺を通った時、やっと屋根に影とメオの姿を認め、急いでそれに割り込んだ。

その際少女も何故か一緒にエラインと影を探し回り、先程のような連携を提案してきた。つまり、彼の飛び道具で影の気をそらし、不意をついて少女が攻撃をするといったもの。

事情は知らないが、少女……セイレーンと名乗った彼女にも何かあの黒い影に何か用があるようだった。

結局あれから何も聞き出すことは出来ず影は逃げてしまったが。

今は三人で部屋に戻り、残りの二人はなにやら色々話していた。

エラインは話にはあまり加わらず、影が残していった短剣の刃をじっと見つめていた。

鋭い刃は部屋の明かりに鈍く光り、エラインの顔をゆらゆらと映している。

『何のために生きているの』

『行くがいい』

耳の奥で声が木霊する。

エラインは額に手を当てた。

(探さなければ、駄目なのか………?)

問いかけの答えは、ない。

2章2節 理由は一つ

あの黒い「影」が消えてからすぐ。銃を何発か撃つなど散々騒いだ筈であるのに、何故か街の住人はおるか、宿の人間さえも起きてこなかった。もし周囲に他の人間がいなければ、もしかしたら夢だったのかもしれないと思うくらいに静寂が辺りを覆っている。

メオはそれに不審を抱くと同時に、酷く不気味なことのように思えた。都合がいいことには良いが、何か嫌な感触を覚える。

しかし、いつまでも屋根の上にいるわけにもいかず、彼らはとりあえずいったん部屋に戻った。突然現れた少女も共に。ともかく、何があつたかを話して欲しかったのだ。

気付けば、真夜中。街の明かりも失せ、空には赤い月だけが浮かんでいた。その赤い三日月も西の空にあり、沈もうとしていた。

最初、メオは真夜中に男二人が泊まっている部屋に女の子を一人入れるのには多少の抵抗があつたが、当の本人はまったく気にした素振りもなく、エラインも気付きもしない。こっそり溜め息をついてから、彼女らを招き入れる。

三人とも目は冴え渡っているようで、部屋に戻つても欠伸一つすることはなかった。明かりを灯し、メオと少女は椅子に、エラインはベットに腰掛ける。

メオはまず少女を明るいところでざっと観察したあと、名を尋ねた。

緑の瞳に茶色の長い髪。髪を二つに分け、金具が何かで下の方でゆったりとまとめている。頭にはベレー帽をかぶっている所から、旅装とはいえフリードリヒ公国の者と推察できた。

そして、彼には彼女の顔に覚えがあつた。

(これは……そう、セーナリオの宿での騒動で見た……娘だ)

何しろ昨日見たばかり。忘れるはずもない。メオは一人で納得して頷いていたが、彼女はそれには気付いていないようだった。

彼は彼女に確認をしてみようと考えたが、すぐに首を振ってあえて問う必要もないと判断する。その話は後回しにすべきだろう。

「少し整理させてもらってもいいかな？」

メオは自分の前で行儀よく座っている少女に向かい、遠慮がちに言った。

「はい」とこれまた丁寧な彼女が頷くのを見て、彼女のから少し斜め後ろのベットのの上に腰掛けていたエラインにも視線を送る。

一つの赤い目は彼を一瞬だけ見て、すぐに己の手中の短剣にむけられた。いつの間にか回収してきた、あの黒尽くめの男が落として行った短剣のようだった。

セイレーンと名乗った少女は、先ほどの男が去った後エラインの前に現れて、彼と共にあの男を追っていたらしい。

「この女が勝手な真似をしただけだ」

そこで、エラインがぼつりと口をはさむ。しかし、相変わらず視線は短剣の方に向けられたままだった。

エラインは、彼を追ってこの宿に行き着いたらしい。

それも全て少女から聞き出したことで、エラインは答える気がないようだった。先ほどのひとこと以外、黙ったままだ。何かしらあの男と関係があるのかもしれない。メオとしては、是非とも聞きたいところなのだが。

エラインの短剣を眺める瞳の色は、昨日の色とかなり違って見えた。興味がなさそうな薄い色ではなく、何か憂いをたたえた深い色合いのように思える。

メオは椅子にもたれて腕を組み、しばし考え込むように瞼を閉じる。

暫くして瞼を開き、エラインのほうに身を乗り出して言った。

「エツちゃん。あの男……とはどういった関係で？」

「……………」

エラインは視線をメオに移したが答えることはなく、黙したままだった。メオはそれを拒否と受け取り、尋ねることはやめた。

自分ですら話していないのだから、答えた貰えないのは仕方ないことかもしれない。

「セイレーンは？」

「え？ ……いえ」

メオに声をかけられて、セイレーンは目をややそらしながら答える。

「そっか」

分かりやすい動揺だ。何かあるに違いないだろう。

納得したような返事をしておいて、その仕種にそう『確信』したが、あえてこれにも何も言わないことにした。

エラインにしるセイレーンにしる、まだメオとは出会ったばかりである。お互いの事情をいきなり話せるわけもない。それは自分も同じだ。

だが、彼のことは出来るだけ知っておきたいと思った。

『肉親を思うのであれば』

彼はそう言ったのだ。虚言にしる事実にしる、何かしら意図があるはずだ。

メオは両手を顔にあて、大きく息をしてもう少し落ち着こうと図った。まだ、興奮している。そしてここ二週間心を重くしていたものが、さらに重みを増したのを感じる。

暫くその状態のままゆっくりと呼吸をしていた。メオが口を閉じると部屋は沈黙に包まれた。

セイレーンは落ち着かない様子で、顔を覆ったままのメオと床を交互に見つめている。

「おい……その金髪」

沈黙を破ったのはエラインだった。

「え？ 俺のこと？」

メオは手の中で少し目を見開いて、両手を下ろし彼に顔を向けるとぼけたような物言いに、銀髪の青年はこめかみを若干引きつらせながら頷いた。

「いやだなあエツちゃん、俺の名前もっ忘れちゃったわけ？ メオだよ、メ・オ」

忘れちゃうなんてひどい！とからかうように言うが、エラインはわずかに眉尻を下げてただけだった。

忘れたというよりは、初めから憶えようという意識がなかったただけだろうというところは察しはついているが、とりあえず恨み言めいたことを言ってみる。

「うるさい。貴様のことなどいちいち憶えてなどいられるか」

「うわあ酷ー！俺は覚えてるのになあ、エツちゃんって」

「……だからそう呼ぶなと言っているだろう」

「ええ、でも言ったじゃないか、『呼びづらい』って。ええと…エ…」

「……喧嘩を売っているのなら、買うが」

「そんなつもりじゃないんだけどな」

言い合いの間に、くすくすという笑い声が聞こえてきて二人は会話を止める。

「あ、すみません……つい」

笑っていたのはセイレーン。口元に手を持っていき、笑いを堪えているような様子だ。

それを見て、メオも小さく笑う。

「何かへんだったかな？」

「いえ……はい、なんだかお二人のやり取りが、妙におかしくて…すみません」

「いいよ、謝らなくても」

すまなさそうに身を縮めて謝るセイレーンに、メオは苦笑を浮かべながらも片手を振って答えた。

エラインは表情をほとんど変えることなく、ただセイレーンに向けていた目を細めただけだった。

そして、再びメオに視線を戻して言う。

「……貴様は行くのか、ルーンデシアに」

「ああ、行くよ」

メオは頷いたあと、ゆっくりと目を閉じた。

あの人物が何者かもわからない。奴が言ったあの言葉に信憑性があるのかも正直疑問だ。

だが奴は知っていた。

あの名を。

(……迷ってなど、いられないか)

「俺も行く。お前と同行する」

「……はい？」

いきなりのエラインの言葉に、メオは面食らって大きく見開いた目で彼を凝視する。

昨日：いやー昨日から今日にかけての彼のメオに対する態度から考えて、そのような言葉をエラインから聞くことになるうとは考えが及ばなかった。

案内人を申し出たといっても半ば無理矢理だ。メオもそのことは自覚していた。

場合によつてはエラインが宿を抜けて逃げてしまいかもしれない、とまで考えていたメオにとっては、意外としか言いようのない言葉だった。

「何度も言わせるな。お前と共にルーンデシアに行くと言っている」

「いや……その、何で急に？」

言葉の下に苛つきを見せながら、エラインはメオから視線をそらし、再び手元の短剣に目を向ける。

「お前には関係ない。もう決めたことだ」

それとも文句でもあるのかとでも言うふうに彼はメオを睨みつけてくる。有無を言わせぬ勢이었다。

それでも妙に納得のいかないメオは尚も問おうとしたとき、セイレーンがおもむろに立ち上がった。

「あの……わたくしもよろしいでしょうか……」

「え？」

先程まで見下ろしていた視線が見上げるそれに変わる。

「わたくしにも、ルーンデシアに行く旅の同行をさせてください」

真っ直ぐに緑の瞳を向けてくるその少女を、メオは途惑いながら見つめた。一体全体どうしてそうなるのか彼には判らなかつた。

そんな彼らを他所に、窓からうつすらと光が差し込み始める。

朝が来たのだ。

2章3節 思い浮かべるは、己が故郷

「メオ」

工具と部品の山に囲まれた部屋で聞き慣れた声がして、メオは作業の手を止め、顔を上げる。

そしてその声の主の顔を見て小さく苦笑した。

彼の目の前……作業部屋の入り口に立っていたのは、茶色の長い髪をポニーテールで結った女性。服装はメオと同じような作業用のもの。それは『副業先』の服だった。

「あれ、今日は非番じゃありませんでしたっけ？」

「……今日ここを辞めると親方から聞いた」

彼女はメオが笑っている顔を見て、やや怒ったような表情を見せながら言う。

「親方には口止めしておいたんですけどねえ」

彼女の来訪があっても立つことなく、作業を再開しながらもメオは笑みを崩さない。今やっている作業は……今日で最後の、この工場でする銃器の修理。

あまり広くない、しかし天井の高いこの工場にそれによって起る作業音が、妙に乾いて響いているように聞こえる。それはどこかひどくよそよそしい。

「国を出るとも聞いた……一体、何が……」

「貴女には関係ないですよ」

外れたネジの代わりを探しながらメオは彼女の言葉を遮った。そう、彼女とは全く関係のない『理由』で、彼は出て行く。

心の中で何度も繰り返し返して確認をする。そして暫く答えがないのをいぶかしみ、作業の手をとめて顔をあげた。

彼女は、先程より幾分か瞳を鋭くして彼を睨んでいた。その顔を少し眺めてから苦笑する。

溜息をついて、ドライバーを机に置いてから、メオはイスに寄り

かかり高い天井を見上げた。

「そうだなあ…… バイトしてるのがバレたからかな？」

そう言った瞬間、鼻先を小型レンズがかすめていった。間を置かず、後方でけたたましい音。心臓が飛び上がる思いをして、投げられてきた方向…… 彼女の方に頭をもどす。

彼女は、小さく泣いていた。

メオは言葉を失った。何故彼女が泣いているのか分からない。

「わたしは…… 冗談を聞きに来たのではない！」

震える声で、しかしそれでいてはつきりと。彼女は言った。

「お前は、何も分かつちやいないんだ……」

*

かちやり。

愛用の銃を森の夜空にかざす。

焚き火の赤い光を受けて、それは木の葉の隙間から覗く夜空にほんのりと赤くひかっていた。

その向こうには、セイレーンと、少し離れたところにエラインが座っている。

「どうかされましたか？」

銃を空に掲げているメオをみて、セイレーンが首をかしげて尋ねてくる。

視線を彼女に向け、メオはちょっとだけ笑ってから、言った。

「……少し、昔を思い出してただけ」

『彼女』とのあのやりとりから、国を出てから二年ほど経っている。昔と言えば昔だし、この前のことと言えばこの前のことだ。

彼女はそうですかと返してからそのまま黙った。エラインは座つたまま何も言わない。

メオはふつと息を吐いた。

アンカイラを出て、三日目の夜。

ここはそこからルーンデシアの方向……西に進んだ小さな森の中である。

奇妙な旅だった。

目指す場所は三人が三人とも同じであったけれども、それぞれの理由、その理由は誰一人として同じではない。たぶんそのはずだ。

そしてその理由を、誰も話さない。

ただ決まって共通していることは「ルーンデシアに行く」こと。

(……でも案外、奇妙でも何でもないのかもしれない)

宿での二人の申し出に、メオは途惑った。ルーンデシアに行く旅に同行したい。互いによくももらない二人にそういわれ、なんと答えればいいのかわからなかった。

そして二人とも理由を話そうとはしない。そんな彼らに、メオはただ首を縦に振った。

自分とともにかの地に行くこと自体に、彼らにとってそれぞれの何か意義があるように思えた。

それに旅をするなら、一人よりは多い方がいい。気心が知れているわけでも、どんな身分の人間かもわからないが、今は一人でいるよりはいいかもしれない。そんなふうに思っている。

メオは銃を降ろし、かわりに持っていた古地図を懐から取り出し地面に広げ、昼間話したことをもう一度頭の中で思い出す。

(マルクトのルシファナ街道にそって一週間も行けば、国境に出る) カレイアとルーンデシアにはさまれたこの共和国はたいした領土を持っていないわけではない。

早足で行けば十日ほどで突っ切ることが出来る。

そこまでは問題はない。……予期せぬ出来事が起こらなければの話だが。

問題はどうかやって国境を越えるか、である。

ドレスト大陸において正式に国境を越えるためには、身分を証明するもの……いわゆる通行手形が必要となる。

国境に設置されている関門で取り調べられ、問題がなければその国内に入る事が出来る。

手形は国によって若干異なるが、メオの国においては手形は役所に申請すれば手に入る。

彼は国を出るときにその手形を授かっていたので、カレイアやマルクトに正式な形で入ることができていた。

しかし。

(エツちゃんにセイレーン……二人とも持っていないなんてなあ……)

旅人である以上、そして国境を越えるつもりである以上は、手形は表向き必携のものである。しかし、メオが出会ってきた旅人の全てが持っていたわけではない。むしろ彼のように手形を持っている旅人のほうが少ない。

国際上のルールとして関所と手形の制度があったが、実際は国境の数箇所に設けられているだけ。関所の設けられているそこを避けて通り、配備されている警備隊に見つからなければだいたいは抜けることが可能だ。

(まだまだということか……)

しかしルーンデシアは国境警備に関しては厳しい国だ。十年ほど前まで、技術の漏洩を怖れていた先の王メド二によって国境の関門が多く設置され、国境警備隊が多く配属されていた。

十年前メド二王が急逝し、スウェルト三世の治世になり技術者出国の禁止が解かれた。それによっていくらかそれらが減ったとはいえ、未だ国境の警備は他国に比べ強いものとなっている。

その状況下で、手形なしで通行をしようというのは相当無茶な話であった。

実際、メオは一応国を出る際に発行された正規の手形を有してい

る。それは彼の正規の身分を現すものではなかったけれど。もつとも、たとえ彼らが手形を持っていたとしても、彼には国に入れない理由があった。

メオは地図に視線を落とす。条約に基づいて、マルクトとルーンデシアの国境は南北に連なるヴァーナ山脈。

高度はそうはないが、険しい山々だ。機械技術が発展している国とはいえ、そういくらも山を削れるわけでもない。関所の数は限られていた。その代わり他の国境より警備隊の数が多めに配置されている。

「ヴァーナを山道からそれて越える……」

「……なんだ？」

思わずつぶやいてしまったのか、それを聞いたエラインが反応する。

セイレーンも彼の方に顔をむけていた。

苦笑しながら国境の越え方について考えていたことを伝える。

「すみません、わたくしついたら手形のことをすっかり失念しておりましたわ……」

と恐縮したのはセイレーン。彼女はメオの考えたとおりフリードリヒ公国出身で、国を出る時手形のことをすっかり忘れていたらしい。彼女が言うには、そんなことを考えている暇がなかったという。それにも色々な事情がありそうだが、今は深く追求すべきではないだろう。

「ないものは、仕方ないさ」

持っている旅人ばかりではない。

「何か身分をあらわすようなものを他に持っていればいいのかもれないけど」

旅人がそのようなものを持っているとは、あまり考えにくい。

彼女の仕種、態度言葉遣いからそれなりの上流階級の育ちであるとは考えられるが。

メオの言葉を受けて、セイレーンは何かを言いかけたが、やめた。それから首を振って、

「申し訳ないです……」

とまた縮こまる。

エラインは何も言わない。メオと目があっても、頭をかいてからすぐに逸らした。

彼には故郷がないという。何処にも国籍を置いておらず、手形を取ろうにも取れる国、役所がない。今迄それで諸国を放浪してきたというから、驚きではある。

「ルーンデシアが特殊なんだ」

身も蓋もない言い方をされて、メオは苦笑した。

それからエラインは空を見上げた。暫く眺めていたが、すぐに焚き火の傍にセイレーンとメオに背を向け、横になる。

もう寝る時間、ということらしい。セイレーンは少し驚いたようなまなざしをエラインに向け、自分も空を見上げていた。しかし彼が夜空を見上げた意味がわからなかったらしく、首をひねる。

メオにも眠気が襲ってきた。大きな欠伸をして、

「詳しいことは、明日話すよ」

と告げたが、背を向けていたエラインからの答えはなかった。まったく無愛想な男である。彼の目的は分からないし愛想もなにもないが、悪い人間には見えない。いっそ、正直過ぎるくらいすらある。だから、愛想が悪くても特に気にならないのかもしれない。

それからセイレーンにも目配せし、睡眠をとるように促す。

「え、でも」

「いいのいいの。セイレーンも三日間歩きづめで疲れてるだろ？ 休んだ方が良いつて」

メオさんだつて、という彼女に、彼は片目をつぶってみせた。

「見張りは男の仕事つてね。大丈夫、変なことはしないし」

「あ、別にそういうことを言っているわけではなくて……」

「だったら早く寝る寝る。交代する時はエツちゃん起こすから」

そう言った瞬間視界の中の彼の背中から、何か敵意にも似た気配を感じたが、敢えてそれを無視をすることにした。

なんとかセイレーンをなだめて寝かしつけた後。

メオは見張り番をしながらも、森から漏れ出す虫の声と、時折奏でられる木の葉の音に耳を寄せた。

空を見上げると、三日前よりは幾らか太った月が顔を覗かせている。アンカイラほど大きく、はっきりと見えるわけではないし、赤いわけでもない。

彼は空を見上げたままゆっくりと目を閉じた。

焚き火の光の残像が瞼に映る。

ルーンデシアに赴く理由。

メオにとっては、家族の安否を確かめる。

それが、理由。

それは彼の意思であって、決して誰かもわからぬ男の意思でも、エラインでもセイレーンでも、他のだれの意思でもない。

瞼を上げ、彼は彼の故郷を想った。

2章4節 エファロンの神々

「……で？ 何で俺が駆り出されるんだ？」

水音と静寂しじまつつまれた空間に似つかわしくない、粗野で険しい声音が響く。

白い壁に、高い天井。

床には清らかな水が引かれ、人が立てる場所の方が少ない。

大きく設けられた天窓からは太陽の光が差し込み、その間を支えている巨大な柱とそこに繁る緑につややかな光を与えている。

人はそこを水の間と呼ぶ。

その白い床には二つの人影が落ちていた。

「あなたの使命だからよ、コルメイ」

影のうちの一つ…白の法衣に身を包んだ女性が静かな口調で、しかしはつきりと告げる。

「手前やアーネストじゃなくてか、リララ」

もう一つの影……コルメイと呼ばれた、顔上半分を布で覆っている赤毛の青年は、大きな柱に寄りかかってだるそうに言った。

それにリララが静かに頷くと、長い水色の髪を飾る鈴がちりんと鳴る。

「かの地は……あなたの……ピロテクニマの従神の管轄でしょう」

「……そういう問題じゃねえってことくらい、分かってるんだろ」

リララは答えない。黙ったまま、しかし青い目でしっかりとコルメイを見据えていた。

彼はそれに舌打ちをすると、柱に身を預けるのをやめる。

「へえへえ、行きますともよ。仰せのとおりにルーン＝ハルムにな」

アーネスト、リララ、コルメイ。

この大陸に住み、エファロン教の存在を知っているものであれば彼らの存在を知らぬ者はいない。

ドミネスト五神が下ったというエファロン教のシンボルにして、神聖国ドーリアを統治する者たち。

彼らはセパラと呼ばれる”神官”だった。

神が降臨した者……人を神の仮の姿、<入れ物>とする。それが、セパラと呼ばれる者たちであった。

神が宿れば、その人間は絶大な力と長寿を得る。

今からおよそ五百年前に、土の神ドーリアが降臨したアーネストはエファロン教を国教とし、自らが統治するドーリア神聖国を打ち立てた。

その中心部に位置する首都、ケレス「イスメルトは聖地とされており、巡礼者で賑わっている。

更にその中心小高い丘にある神殿のふちに、コルメイは立っていた。

彼はセパラのうち一人。火の神ピロテクニマが宿っている。見た目は二十代の若者であるが、実年齢は計り知れない。当人も一体幾つ年を重ねてきたのか、よく分かっていないようだった。分かったところで意味もなく、第一数える行為がバカらしい、というのが彼の考え方だ。

巡礼者で賑わう都市を眼下に……といっても彼は「目」は見えなかったが……臨む。彼はセパラとなったときにその代償が、いくつが大事なものと大切なものを失った。

その一つが、視力だった。目は見えないが、心で感じる……視ることはできるようになっていた。顔上半分を布で覆っていたとしても見えないものはなかった。

都市の賑わいを心に感じながら、先ほどのリララとの会話を思い出す。

「あなたが向かうべき場所に”あれ”がいるの」

「アーネストか？」

「彼が、感じ取った。器も近づいて来ている」

それ以外の会話を彼は覚えていない。

「あいつらは、俺が『分からない』のを分かっているのかね」

コルメイは一人ごちた。もちろん答える者は誰もいない。

彼らが一体何を言っているのかは理解している。これから何をすべきかも分かっている。これは記憶ではない。

コルメイは己の武器である大剣を握り締める。

「少しは楽しませてくれるんだろうな……」

コルメイはよく遠出をしていた。

ケレスⅡイースメルトという『檻』の中でじっとしているのは、彼にとつては耐えがたいものだった。

宿った力を使えば行きたい所に好きなようにいける。それは彼にとつては疎ましいものだが、「使えるものは最大限に使う」それが彼の流儀であり、諦めでもあった。

今回の行く先にも過去に何度か訪れたことがあるはずだ。記憶は曖昧だった。

「とは言うものの……」

世間的に顔の知れている彼を派遣することの意図が、コルメイにはよくわからなかった。仮にもドーリア神聖国を治めるものであるセパラが他国に現れたと知れたら、大変な騒ぎとなるのは考えるまでもない。

彼に宿るピロテクニマなら、それを知っているかもしれない

が。聞き出せるものでもない。

単に”あれ”を監視するだけなら、かの地に配属されている従神に任せておけばいい。彼らは力こそは弱いが、コルメイより多少はものを考えるものはずだ。しくじることもないだろう。

国の防護の面でも斥候、監視役を務めているコルメイを出すことは多少の緩みを生じさせる。いくら直属の精鋭騎士団『ルーン』として、実質はただの人間である。

「考えてもしゃーねえか……」

考えるのは彼の得意分野ではない。
どうせすぐに忘れていくのだから。

彼は大剣を肩に担ぐと、前振りもなしにその場から姿を消した。

目的は、ルーン＝ハルム。

そこはルーンデシアの首都、王城がある都市であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3146ba/>

ROUND SHAPE

2012年1月12日03時23分発行